

第3章 紀州徳川家の時代



文化・文政期の紀州の文化



時代区分	旧石器・縄文・弥生時代
	古墳時代
	飛鳥・奈良・平安時代
	鎌倉・室町時代
	戦国・安土桃山時代
	江戸時代
明治・大正・昭和(戦前)時代	
昭和(戦後)・平成時代	

徳川治宝と学問芸術

文化・文政年間（1804～1829）は、幕末から明治維新へとつづく激動期の直前にあたり、江戸時代の中でも文化が最も栄えた時期です。

和歌山では、徳川治宝が1789（寛政元）年に10代藩主となり、1853（嘉永6）年に亡くなるまで長い間、藩の政治を動かしました。治宝は、藩の学校を改築して学習館とよび、また医学館も設けて、数多くの学者を集め、儒学や医学などの教育に力をそそぎました。藩内各地の地理や歴史を調査し、奈良時代の『風土記』にならって、『紀伊続風土記』192巻を1806（文化3）年から30年あまりかけて完成させました。また藩内の名所旧跡や産業を、さし絵入りで紹介した『紀伊国名所図会』18巻も、1811年から40年あまりかけて刊行しています。これらは、江戸時代後期の和歌山のようすや当時の人々の考え方を知らうえで、とても貴重な資料となっています。

徳川治宝という文化・芸術に理解の深い藩主のもとで、才能をもった人々が和歌山に集まりました。そうした人々の刺激を受けて、和歌山の文化が広い分野にわたって大いに盛りあがりました。

そしてさらに、この時代につくられた文化的土壌は、現代に生きる私たちの生活の中にも、生け花、茶道、焼物、絵画など、いろいろな形で息づいています。

茶道と焼物

藩政や儀式のきまりなどに、ひととき見識の高かった治宝は、芸術的な才能においてもすぐれていました。絵画や書道、音楽の分野で人並み以上の力を発揮していますが、とりわけ茶道には熱心で、京都の茶道の家元である表千家を積極的に支援しています。また、隠居後も広大な別邸の西浜御殿に移り住み、側近たちを集めて藩の政治について発言したり、邸内の庭園の借景園で茶道に使う茶碗などの焼物や織物、塗りものをつくらせ



養翠園（西浜御殿の別邸）



偕楽園焼 (和歌山県立博物館蔵)



南紀男山焼 (和歌山県立博物館蔵)



瑞芝焼 (和歌山県立博物館蔵)



桑山玉洲筆 那智之滝図
(和歌山県立博物館蔵)

たりして楽しみました。偕楽園で焼かれた陶器は、特に「偕楽園焼」とよばれて有名です。

高い温度を必要とする青磁や染付という種類の焼物は、別なところで焼かせました。青磁は、和歌山城下に「瑞芝焼」という窯があり、そこで焼かせました。染付は、和歌山城下の「南紀高松焼」と、有田郡の広村にあった「南紀男山焼」の窯で焼いています。この窯では、ふつうの食器を何万個もつくって、船で江戸や大坂に運んで売りさばき、利益をあげました。広の「南紀男山焼」は藩の直営事業として栄えました。

しかし、廃藩置県で藩がなくなると、資金が不足して経営も行きづまりました。また、紀州藩の名で広げていた販路も失い、多くの陶工が働いたのぼり窯も使用されなくなりました。

絵画と絵師

絵画では、城や御殿のふすま絵のように大きなものでは、狩野派や土佐派のような伝統的な絵を学んだ専門の画家が描きましたが、少し前の江戸時代の中ごろに中国から南画が入ってきました。「南画」は、筆と墨があれば描けるもので、梅・竹・蘭・菊といった親しみやすい植物や、山水、つまり空想の風景が題材であったこともあって、またたく間に広まっていきました。特にこの時代では、学者や僧侶から一般の人々までが絵を描くようになります。なかでも、桑山玉洲(1746～1799)と野呂介石(1747～1828)は、当時から全国的に名を知られていました。玉洲は早くなくなりますが、介石は長く活躍して数多くの弟子を育てました。そうした人たちの作品は今に伝えられています。